

第75回企画展
歌人

田波御白

たなみみしろ

—生きむとす



海は海、われはわれとて、日ねもすを
何かなしみて何なげくらむ。



田波御白肖像 東京帝国大学在学中 個人蔵

令和3年10月30日[土]—12月12日[日]

開館時間=9:00~17:00(入館は16:30まで)

休館日=月曜日・祝日の翌日・第4金曜日(11/1・4・8・15・22・24・26・29・12/6)

入館料=一般200円(100円) 高校・大学生100円(50円) 中学生以下無料

* ()内は20名様以上の団体割引

* 無料公開日=11/3・7・23

* おやまミュージアム割引

令和3年度の小山市立車屋美術館の半券提示で団体料金適用

小山市立博物館

〒329-0214 栃木県小山市乙女1-31-7 TEL0285-45-5331

<http://www.city.oyama.tochigi.jp/site/hakubutu/>

田波御白

わが息にふれてさきけむ花のやう君が頬に頬にうす紅さしぬ

「みしろ」と読む。本名は庄蔵。

小山市南小林で明治18年(1885)11月8日に誕生。

栃木中学のとき初めて雑誌に短歌を投稿する。

師金子薫園と出会い、白菊会に参加。

高校受験の浪人中に母を亡くした。

一途な恋をした。その恋は叶わなかった。

それでも歌は作り続けた。

大学の卒業間際、肺結核にかかる。

2年あまりの闘病生活を送った。

生と死の間でしぼりだすように歌を作り続けた。

神奈川七里ヶ浜の療養所で遠い故郷を思っていた。

大正2年(1913)8月25日に永眠。

その生涯は27年と10ヶ月あまりだった。

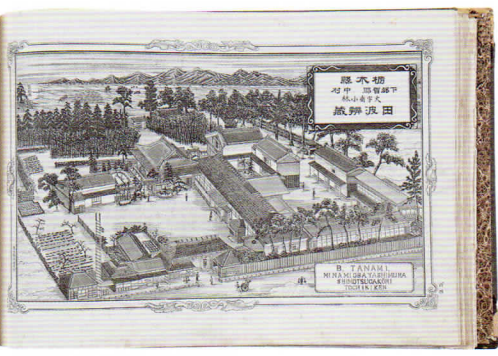
本展では歌人田波御白の生涯をたどりながらその折々で作られた作品の数々を紹介します。

この展示が多くの皆さまにとって

御白と彼が遺した作品との出会いの場となれば幸いです。

このねがひかなは花よ紅う咲けと

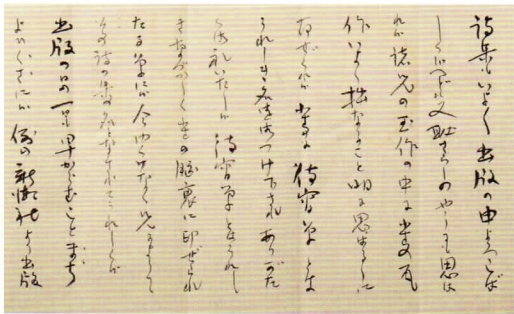
土をきせたる秋ぐさの種



『田波弁藏』『大日本博覧図 栃木県之部』

明治23年(1890)11月刊 田波家文書

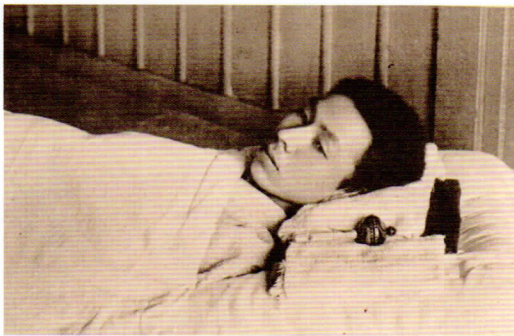
御白が誕生した頃の田波家。生家は農業を営み、「大田波」とも呼ばれ、古河藩の大庄屋を務めた旧家である。



田波御白書簡 佐瀬蘭舟宛て

明治39年[1906][2].25 県立神奈川近代文学館蔵

岡山の第六高等学校時代、所属する白菊会同人の歌が附された金子薫園歌集『伶人』が発刊される。御白は敬愛する蘭舟から、短歌群の名称に「待宵草」と名を付けてもらい「うれしき名を御つけ下されありがたく、出版が「まちよひくさ」に候」とおどけながらはしゃいでいる。



病床の御白

大正2年(1913)頃カ 『御白遺稿』より

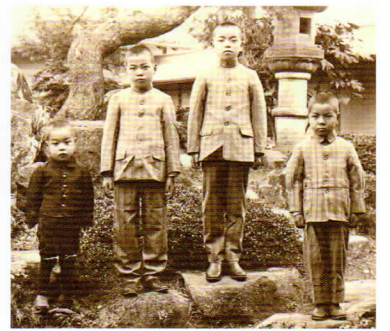
帝大在学中の明治44年(1911)、御白は当時不治の病であった肺結核にかかる。病状は好転せず、2年あまりの療養ののち最後に転院した神奈川七里ヶ浜の療養所で27歳の生涯を終えた。



『帝国文学 第十五卷第八』

明治42年(1909)8月刊 当館蔵

御白は東京帝国大学入学後まもなくから、『帝国文学』に精力的に短歌を投稿し始める。その数は5年間で500首あまりにも及んだ。思い人との別れ、病の苦しみ、死への恐れ、戻れぬ故郷への思い、そこには御白の人生が映し出されている。



記念写真

明治25年(1892)頃カ 田波家文書

御白(右)は9人兄弟の三男第六子として誕生した。

いろくのかなしきことをとりあつめ 闇にまぎれてなくをうれしむ



のうぜんかずら

『凌霄花』金子薫園

明治38年(1905)7月刊 当館蔵

金子薫園の選で青年投稿者の歌を集めた歌集。御白の歌は12首掲載された。白菊会同人の他、前田夕暮、若山牧水の歌も見られる。

生きむとす 生きて甲斐ある日を送り、 死して甲斐ある 死を死むるべく

関連事業

記念講演会「田波御白の人と作品」

日時=11月14日(日)13:30~15:30

対象=一般 30名(電話で要申込。先着。)

講師=歌人 外塚 喬氏 朔日短歌会代表/現代歌人協会副理事長

申込みは博物館に電話で。(Tel.0285-45-5331)



アクセス【電車の場合】JR宇都宮線間々田駅西口下車、徒歩8分
【車の場合】国道4号線から間々田駅入口交差点を西に2分

小山市立博物館

〒329-0214 栃木県小山市乙女1-31-7 Tel.0285-45-5331
http://www.city.oyama.tochigi.jp/site/hakubutu/



病める枕上、ぎやまん鉢に死のこりてただひとつ金魚は泳げり